

第7回チャイナサロンを2023年6月18日、富士見市鶴瀬西交流センターで開催、「中国残留婦人祖母シズの生涯」と題して、首都圏中国帰国者支援・交流センター、巻口さんが講演した。



1945年(昭和20年)当時、旧満州(中国東北部)には開拓団など多くの日本人が居住していましたが同年8月9日、突然のソ連参戦により、居住地をおわれ、逃避行中や収容所において飢餓や伝染病により死亡者が続出するという、悲惨な状況が生まれました、このような混乱の中、肉親と離別して中国の養父母に育てられたり、中国の人の妻になるなどしてやむなく中国にとどまった方々を「中国残留邦人」と呼びます。これらの人達はその後長きにわたって日本への帰国が叶わず、「残留」せざるを得ませんでした。また、残留邦人の一部に樺太(サハリン)や旧ソ連本土に残されていた人達を「樺太等残留邦人」と称し、合わせて「中国残留邦人等」と呼びます。中高年となってようやく祖国の土を踏むことができた、これらの人達を「中国・樺太(サハリン)帰国者」と呼んでいます。帰国者の祖国での暮らしは、戦争の傷跡に苦しみと一緒に帰ってきた家族とともに言葉の壁や文化の違いに苦しむ日々でもありました。

巻口清美さんは、祖母シズと、祖母の二男の父が中国残留邦人で、自身はその父(電話技師)と中国人の母(銀行員)との間に生まれた2世。中国黒竜江省で生まれ育った。82年、16歳の時に家族と共に「帰国」した。当初は日本語が分からず苦労を重ね、二つの国に生きる厳しさを自ら味わい、残留邦人の苦労を知る。日本で、中学、高校を卒業して就職し、中国に留学して後帰国して結婚した。今は、首都圏中国帰国者支援・交流センターの「戦後世代の語り部」として、歴史を知り、次の世代に受け継ぐ重要さをかみしめ、活躍しておられる。

感想文 若園義彦

「苦難の果て—満蒙の原野に吹いた烈風」

あまりにも苛烈、何という悲劇か。つい70数年前に直面した人々の、苦難とその後が語られる。単に気の毒だ、可愛そうだという感情だけでよいのか。そんな提起が突きつけられた。

今回はDVD「満蒙開拓の真実」の映像に引き込まれた後、首都圏中国帰国者支援・交流センターの語り部巻口清美さんが祖母の人生と、それに重なる自分の生きてきた道を語ってくれた。国策にのせられて大陸に渡った祖母は努力の末に得た生活基盤は、ソ連軍の侵攻によって暗転する。必死の逃避行の末、4人の子どもの命のために中国人の妻となるも、望郷の思いは募る。その後一人帰国した祖母にとって子どもは忘れ難い。巻口さんも日本人の道を選ぶが、そこには残留者帰国者それぞれの明暗と苦悩に満ちていた。

国とは何か、故郷とはどこにあるのか、家族のつながりとは如何にあるべきか。この問いは重い。国策の誤り、それを糾す力、私たち国民に鋭く突きつけられた。そんな思いのする講話だった。整理され紙に書かれた記録とは違う、言葉の力によって伝えられる生きてきた歴史がここにはあった。